

研究課題：在宅および施設療養中の摂食・嚥下障害患者に対する訪問歯科診療での内視鏡検査による嚥下機能評価の有用性

研究者名：中川量晴^{1, 3)}、戸原玄¹⁾、植田耕一郎¹⁾、植松宏²⁾

所属：¹⁾ 日本大学歯学部摂食機能療法学講座、²⁾ 東京医科歯科大学医歯学総合研究科老化制御学系専攻口腔老化制御学講座高齢者歯科学分野、³⁾ 昭和大学歯学部口腔衛生学教室

1. 緒言

在宅および施設における訪問診療では、いわゆる歯科治療のみにとどまらず、具体的な食事指導や摂食機能訓練を求められる場面に遭遇することは少なくない。嚥下内視鏡検査 (VE: Videoendoscopic Evaluation of Swallowing) は、その携行性や操作性の高さから特に訪問診療における機能評価に有用である。訪問診療での摂食・嚥下指導においては、患者や介助者が摂食・嚥下障害の動態やその対応方法を理解し、日常的に実施できることが重要である。このような背景から、患者や介助者が指導内容を理解するために VE が有用であるかを検証した。

2. 対象・方法

(1) 在宅および施設療養中で何らかの摂食・嚥下障害が疑われる患者 26 名を対象として、嚥下簡易検査 (RSST, MWST) と VE を 2 回に分けて実施し、それぞれの指導内容に対する被験者の理解度を VAS (Visual Analogue Scale) 法を用いて評価した。

(2) 何らかの摂食・嚥下障害が疑われ、簡易検査により指導をした患者 18 名と VE で指導をした患者 10 名に対して、その後の経過において肺炎を予防できなかった患者数を調査した。

3. 結果・考察

(1) 簡易検査と VE 後の指導にて、VAS が変化するか比較したところ、「摂食・嚥下の動態把握」および「指導内容の理解」の 10 項目中 7 項目で、VE 指導後に理解度が有意に高くなった。

(2) 簡易検査後に肺炎を発症した患者は 18 名中 5 名、VE 後に肺炎を発症した患者は 10 名中 1 名で、それぞれの肺炎発症率は、27.8%、10.0%であった。

目で見ることのできない嚥下動態や咽頭の状態を、視覚的に観察させながら解説することは、被験者がイメージを得る一助となり、理解されやすいことが示唆された。訓練や食事指導をする際に、VE 画像によりその訓練効果を被験者にフィードバックすることは、施設や在宅で訓練を实践するうえで、被験者のモチベーションやその効果を高めることに有用になり得ると考えられた。さらに、被験者の理解度により肺炎の発症頻度が変化する可能性が示唆された。

4. まとめ

VE を用いて摂食・嚥下指導することにより、指導内容に対する被験者の理解度が高まった。また、被験者の理解度とその後の肺炎発症頻度に関連がある可能性が示唆された。以上より、在宅や施設における摂食・嚥下障害患者への対応は、指導内容をよく患者に理解させることが重要で、VE は検査者のみならず被検査者の立場からも有用であることが示された。